

## 炉開きの季節

今年も無事に、お茶の師匠のお宅で炉開きを迎えることができました。

11月は茶人の正月とも言って、これまでの風炉をしまい、炉を使い始めるようになります。これを炉開きと言うのです。社中はそろって師匠に向かい「炉開きおめでとうございます」と挨拶をし、師匠はぜんざいを振る舞うのがしきたりです。

唯一の二十代だった我が社中の女性が、この春、遠方に就職してしまったので、今年の炉開きは一気に年齢層が高くなったような気がします。時候の挨拶の次に、遠慮なく身体の不調を披露しあうのが、いつものことになりました。

そして、老いというものは、こんなきっかけで顕然化するのか、などと思うと可笑しくもあります。

稽古場の待合には、松尾芭蕉の句を書いた色紙が掲げられていました。

### 炉開きや左官老い行く鬢（びん）の霜

今では茶道の世界でしか認識されることのない炉開きは、芭蕉の生きていた頃には、冬支度の一大風物詩だったのでしょうか。炉開きの準備をする左官たちが、町中を忙しそうに駆け回っていたのだと思います。そうしてすれ違った左官の鬢には、気が付けば白いものが混じっている。老いというものを意外なきっかけで見つけた芭蕉が、冬支度をする町の様子を溶け込ませるように詠んだ一句です。

冬支度をする町も、老い行く左官の白髪も、決して淋しいだけのものではなく、同じ時間と空間を共有する者の、懐かしさのようなものがにじみ出ています。忙しくも淋しくもある、この時季の景色を見回すことによって生まれる感慨です。

炉の稽古を始めて、こんなことを感じました。

炉の釜の湯はこれまで見慣れた風炉の湯よりも、ずっと目線の下の方であって、茶席の全体の目線が下に注がれるように感じます。それでいて釜の蓋を開けると湯気は勢いよく立ち登り、柄杓で湯をすくうと湯気のダンスがちょうど目線のあたりに漂うのです。炉の醍醐味は、温かさを共有することもさることながら、湯気によって創り出される贅沢な空間演出を、共有することなのかもしれないと思いました。

## ■ 炉開きと老いの世界

実際にその只中に入ってみて、見える景色の新しさに気付く、そういう意味では、「老い」というものは炉開きに通じるところがあるのかもしれない。「炉開きおめでとうございます」と社中の皆で声を合わせるのも、新しい世界に入っていくための合図なのだと思います。

そうやって、炉の茶席という世界、あるいは老いという世界に入ってみて、その中をじっくり見回してみると、そこはひたすら閉じこもる場所ではなく、自分にとって新しい世界であることに改めて気付きます。新しい世界であることに気付くとは、古い世界も新しい世界もひっくるめて見渡せる、どこか俯瞰した場所に自分を置いているということではないでしょうか。

私自身が老いを感じるようになり、その自覚を持ちながら「老いの世界」に閉じこもらない術について、最近よく考えるのです。

## ■ 夏目漱石の『道草』

この数年、よく読み返すようになったのが、夏目漱石の晩年の作品で、そこには老いに「閉じこもらない」ことのヒントが隠されているように思います。

漱石は晩年、胃潰瘍による大量吐血という生死の境を潜り抜けて、確実に死に近づいたことを自覚したのち、『彼岸過迄』『行人』『こころ』といった、前期作品群よりも深みのある傑作を続けて公にします。

その時期の作品『道草』には、とうに縁を切ったはずの養父が、しきりに金を無心に來る話が出てきます。養父にお金を渡してしまう主人公に、妻は不満を募らせ夫婦仲に亀裂が入る様子が克明に描かれていて、そこが何とも下世話な感覚でおかしいのです。この養父との関係は漱石自身の実体験をもとにしているのです、相当に達観した視線でなければ、小説の題材にできなかつたでしょうし、それを面白く詳細に描いて見せることなどできなかつたと思います。

死に直面した老境にいるという自覚があり、その老境に達した自分の世界をじっくりと見回すことがあって初めて、漱石は自分自身を俯瞰し、作品として面白く描くことができたのだと思います。

主人公の最後の台詞に「世の中に片付くなんてものはほとんどありゃしない」とありますが、それはボヤキというよりも、身内のゴタゴタをやむ無くやり過ごすうちに、達観した一言のように思えてなりません。

先ほどご紹介した芭蕉の句では、左官の白髪を垣間見て、冬支度をする町とともに、自分自身の老いもそこに重ねて見ていました。その老いた自分は、去年までの年の瀬とは違う町の様子を、「新しいもの」として受け入れる、より高い視点を備えているように思います。

老いに閉じこもらないということは、老いを拒絶することではなく、老いの中にあつて、まわりをじっくりと見回し、これを受け入れることではないか。難しいことだと思いますが、これから心掛けていきたいと思えます。

(所長 瀬戸 英晴)